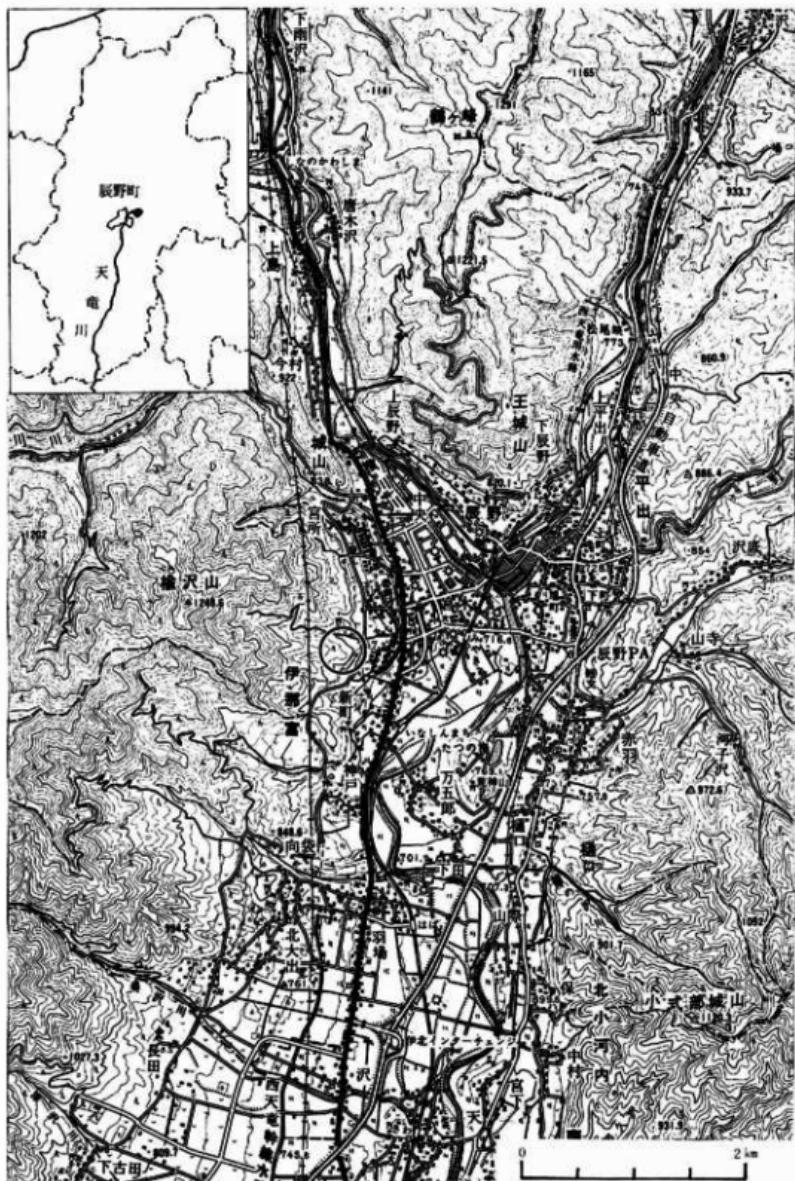


富士塚北遺跡

辰野町富士塚開発（分譲住宅地造成）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

長野県辰野町教育委員会



富士塚北遺跡の位置 (○印)

序

辰野町では現在250カ所余の埋蔵文化財包蔵地が知られています。近年開発行為の進行に伴って、これら包蔵地の緊急調査が増加しております。

本件調査もこうした緊急発掘調査のひとつで、辰野町土地開発公社による分譲住宅地造成に伴い事前に調査を行いました。

この遺跡は宮木地区西方の山麓に立地しており、近くの尾根上には「富士塚」と呼ばれる民間信仰の遺構があり、遺跡の名称もそれによっています。

調査の結果、櫛沢川に沿って東西に広がる平坦部から、縄文時代の狩猟用の落し穴をはじめ各種の遺構が出土しました。付近の山林には、猪から農作物を護る猪土手の遺構ものこっており、縄文時代以来一帯が野性動物の生息に好適な土地であったことを物語っています。

ここに調査報告書を刊行する運びとなり、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ、辰野町土地開発公社、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げるとともに、この報告書が広く活用されることを願う次第です。

平成3年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林晃一

例　　言

1. 本書は、辰野町土地開発公社による分譲住宅地造成工事（富士塚開発）に伴う、長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3443番地ほか25筆に所在する富士塚北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、発掘主体者辰野町土地開発公社理事長小沢惣衛の委託により、辰野町教育委員会が考古学研究者友野良一を団長とする調査団を編成して行った。
3. 発掘調査の現場作業は、昭和57年10月13日から10月14日まで予備調査を行い、10月28日から12月20日まで本調査を実施した。
4. 発掘調査現場における記録は主として赤羽義洋が行い、遺構等の実測図作成は保科徳子、山内志賀子が補助した。
出土遺物等の整理及び報告書の作成は赤羽が当り、一部佐藤直子・小池幸夫の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は赤羽が担当した。
6. 調査及び整理にあたっては、実測図・写真等多数を作成したが、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会が保管しているので、広く活用されたい。

目　　次

序

例言

I 保護措置の経緯	1
II 発掘調査の経過	2
III 発掘調査の方法と調査結果の概要	2
IV 遺跡の環境	5
V 遺構と遺物	7
VI 調査のまとめ	17

図版目次

図版 1 調査区	13
図版 2 調査区／「富士塚」	14
図版 3 第2号ローム・マウンド／第8号土坑／第9号土坑／第2号集石	15
図版 4 第1号土坑／第5号土坑／第7号土坑／第9号土坑／第10号土坑／第1号集石	16

I 保護措置の経緯

昭和56年4月、町の住宅需要に応じるため、労働省雇用促進事業団による雇用促進住宅（5階建2棟80戸）を宮木富士塚地籍へ誘致する話がおこり、5月地権者を中心開発委員会が発足し、長野町土地開発公社により土地買収が行われた。その後昭和57年3月、労働省より現地は地盤の関係から雇用促進住宅建設には不適との回答があり、町による分譲住宅地造成に計画が変更されることとなった。

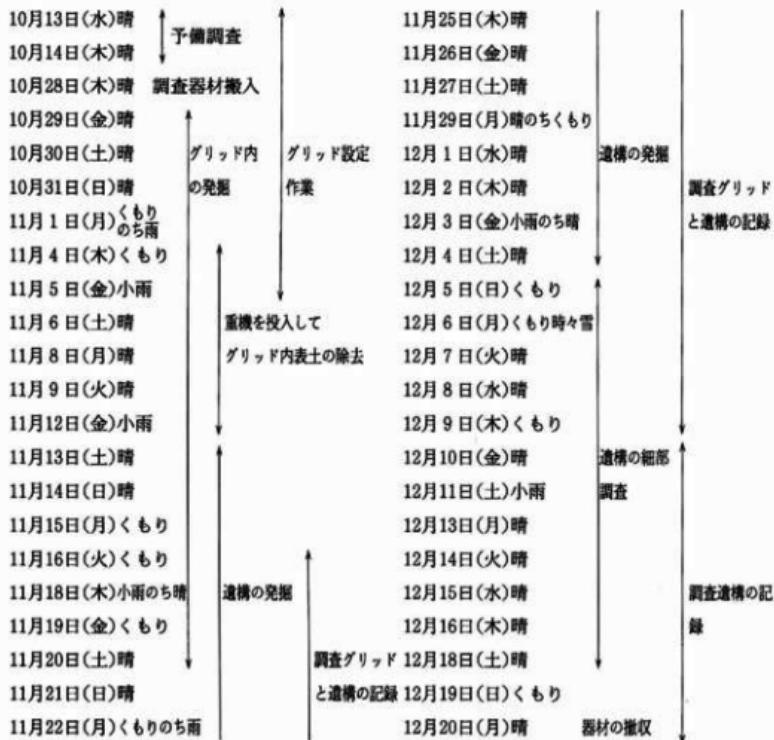
昭和57年10月5日、長野町土地開発公社理事長小沢惣衛から長野町教育委員会教育長小林晃一に、埋蔵文化財包蔵地富士塚北遺跡の取扱いについて協議が行われた。教育委員会では早速現地を踏査したところ、縄文土器片、石器等を採集した。このため、10月13日、14日現地の予備調査を行い、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑5カ所、 $2\text{m} \times 30\text{m}$ の試掘坑1カ所を発掘し、町土地開発公社、町教育委員会それに考古学学識経験者友野良一氏の三者により、遺跡の保護について協議を行った。その結果、開発予定地約32,000m²のうち地形的に平坦な約18,000m²を対象に発掘調査を行うこととし、 $10\text{m} \times 10\text{m}$ の範囲内に4m²の調査坑1カ所を設けて発掘を行い、遺構等の存在が確認された箇所については調査坑を拡張して調査することとなった。

10月28日調査の準備を行い、29日から現地の発掘調査を開始したが、一帯は第二次大戦中の開墾地で、その後植林されていたためいたる所に樹木根があり、発掘作業は難航した。12月18日、富士塚北遺跡の調査及び町埋蔵文化財の取扱いについて現地で県文化課の指導を得、12月20日現場における作業を終了した。



第1図 開発予定地の位置

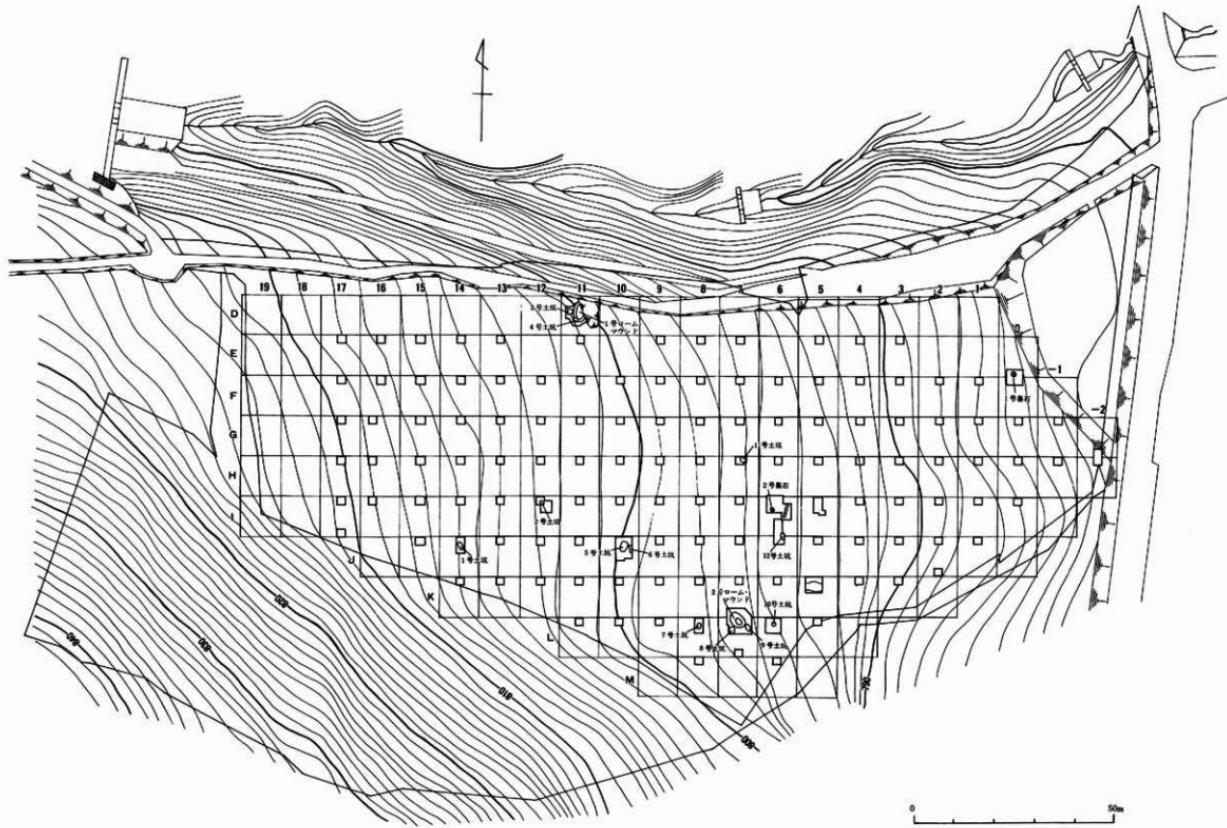
II 発掘調査の経過



III 発掘調査の方法と調査結果の概要

今回開発予定地の面積は31,946m²と広大で、このうち平坦部の約20,000m²が直接造成工事の対象となつたため、この範囲内に10m×10mのメッシュを設定し、100m²について2m×2mの試掘坑1カ所を設け、全体の遺構の分布を把握することとした。一帯は戦後植林されたため樹木痕やブッシュが著しく、一部の調査坑についてはバックホーによって表土の除去を行った。遺構が確認されたグリッドを中心に拡張して遺構周辺や内部の調査を行つたが、全体の実発掘面積は約670m²である。記録は各試掘坑の土層及び出土遺構の実測図作成や写真撮影によって行った。

調査の結果、土坑13カ所、ローム・マウンド2カ所のほか各種の落ち込み等が発見され、人工遺物は表採品も含め約50点が出土し、他に木炭や焼土の出土があった。



第2図 調査区全体図

IV 遺跡の環境

地理的位置 富士塚北遺跡は辰野町宮木の辰野総合病院西方の山麓で、榎沢川右岸の平坦部一帯に所在する。標高は780m~810mにあり、横川川と天竜川との合流点付近からの比高は60m~90mである。遺跡西方は木曾山脈北部に属する経ヶ岳山塊の北端で、榎沢山(標高1248.6m)があり、その山腹に源を発して東へ流れる榎沢川が扇状地を形成しており、遺跡はその扇頂部に立地する。

地形・地質 南北70kmに達する伊那盆地の最北端に位置する辰野町の平坦部一帯は、木曾山脈の北端と赤石山脈の北端によって西と東を遮られており、北には標高1035mの大城山がある。これら三方の山地に囲まれた平坦部は、構造運動によって形成されたとされる伊那盆地の低地が埋ったもので、基盤の古生層の上に天竜川本流の古い堆積物、諏訪湖周辺の火山から供給された火山碎屑物、天竜支流河川から運ばれてきた堆積物、風成テラフ、それに崖縦堆積物や沖積土によって構成されている。

一方この地域には、天竜川沿岸から山麓にかけて段丘が発達しており、荒神山周辺では6段、その北では3~4段が形成されている。富士塚北遺跡は最上段の段丘面が山麓で崖縦に覆われるところにあり、この段丘はテラフと崖縦堆積物が互層をなしていることから、一帯の扇状地の形成は断続的に続いていると考えられている。また、この段丘はPm—Ⅲ降灰以前に離水し、基盤を構成する横川疊層には、砂岩、粘板岩、珪岩、チャートなどが含まれる。

なお、付近には活断層の存在が知られ、ケルン・コルやケルン・バットの地形があり、ローム層を切る断層の露頭も観察されている。



第3図 辰野町主要部段丘面区分図

歴史的な環境 長野町宮木地区から新町地区にかけては町内でも遺跡が密集するところのひとつで、低位から高位にかけての段丘上には大規模な遺跡が櫛並みに分布している。町内最大の面積をもつ前田遺跡はじめ、発掘調査が行われた遺跡も多い。

櫛並みの遺跡は昭和61年と平成元年に調査が行われ、縄文時代早期の押型文土器を出土した住居址や集石炉が発見されている。上の山遺跡は昭和61年以降4次にわたって発掘調査が実施され縄文時代早期の小窓穴や中期の住居址群が出土しており、中世の城郭遺構も発見されている。隣接する滝洞遺跡でも、昭和60年の発掘調査で中世の遺構が出土した。上原遺跡は昭和57年に発掘調査が行われ、縄文時代の遺構が出土している。このほか、檜沢山麓遺跡は縄文時代前期末の遺物が採集されるところとして古くから知られており、泉水遺跡からは戦前に縄文時代後期の土偶が発見され、現在県宝に指定されている。一方、前田遺跡からは長野西小学校付近を中心に縄文時代中期の遺物が多く出土しているが、奈良・平安時代の遺物も遺跡内各所から採集されており、この時代に現在の北之沢川以北一帯に置かれていたと考えられる宮廻牧の中核的な遺跡である可能性がある。

周辺の遺跡

40. 湯舟（縄文・中、奈良・平安）
41. 檜沢山麓（縄文・前・中、奈良・平安）
42. 湯舟西（縄文・中）
43. 上の山（縄文・早～中、中世）昭61～平1発掘調査
44. 久保田（縄文・中、奈良・平安）
45. 月丘の森（古墳、奈良・平安？）
46. 前田（縄文・中、奈良・平安）
47. 上原（縄文・中・晚？）昭57発掘調査
48. 天狗坂（縄文・中）
50. 富士塚東（縄文・中、奈良・平安）
51. 横林（縄文・早～後）昭61～平1発掘調査
52. 泉水（縄文・後）県宝指定土偶出土
53. 泉水南（奈良・平安）
215. 長久寺下（縄文・中？）
221. 横林第二（縄文・早・中）
222. 富士塚北（縄文・中？）
223. 滝洞（縄文・中、中世）昭60発掘調査
224. 南湯舟（縄文・中、奈良・平安、中世～）
225. 北湯舟A（縄文・中、奈良・平安？、中世～）
226. 北湯舟B（縄文・中、中世～）
230. 飯宿（奈良・平安）
244. 木戸脇（縄文・後）



第4図 周辺遺跡分布図

V 遺構と遺物

層序 遺跡は榎沢山東麓の、榎沢川右岸の傾斜した平坦地に立地し、調査区内の基本的な土層については第5図のとおりである。

Iは表土層で、戦前の開墾の際の埋土と耕作土である。軟質な黒褐色土である。IIは黒色土で、下部の色調は黒褐色に近く、榎沢川寄りの一部には山砂利を含んでいるところがある。IIIは褐色土で、次のIV層上部へ移行する土層である。IVは黄褐色土で、ソフトローム上部に当る。遺物のうち、縄文時代のものは主としてIIとIIIに含まれており、近世以降の陶磁器片や金属品はI及びIIに含まれていた。

第1号土坑(第6図) J-14区内から発見された土坑で、開口部の直径が約1.5m、短径が0.9mの楕円形、底面は平行四辺形を呈している。底部中央及び北壁に径10~15cmのピットがあるが、口徑が小さく、掘り上げはしていない。土坑内の土層は、底面近くでロームをブロック状に混合している黒色土がレンズ状に堆積しており、土坑北寄りの底面直上層には木炭の包含が認められた。土坑内からは、第9図6の縄文土器細片、同10の粘板岩製の打製石斧各1点が出土している。

第2号土坑(第7図) J-12区内から発見された深さ約30cmの浅い土坑で、不規則な平面形をしている。壁、底面とも不明瞭で、積極的に遺構とするには根拠が薄弱だが、現場調査時には一応土坑として処理している。内部の土層から、第9図1・2の縄文時代中期の土器片2点が出土した。

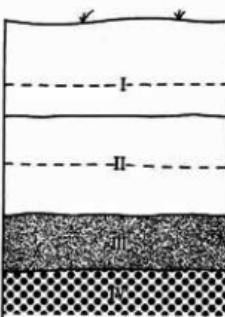
第3号土坑(第8図) D-11区内のローム・マウンドの調査に伴ってその西側に発見された落ち込みで、不規則な形状を呈する。土坑の東側に接してロームが集中する箇所があり、内部にはわずかな焼土1カ所が認められた。

第4号土坑(第8図) D-11区の第1号ローム・マウンドの落ち込みを掘り下げる過程で確認された土坑で、やはり東側に接してロームがまとまっている。土坑掘削の際のものと思われる。

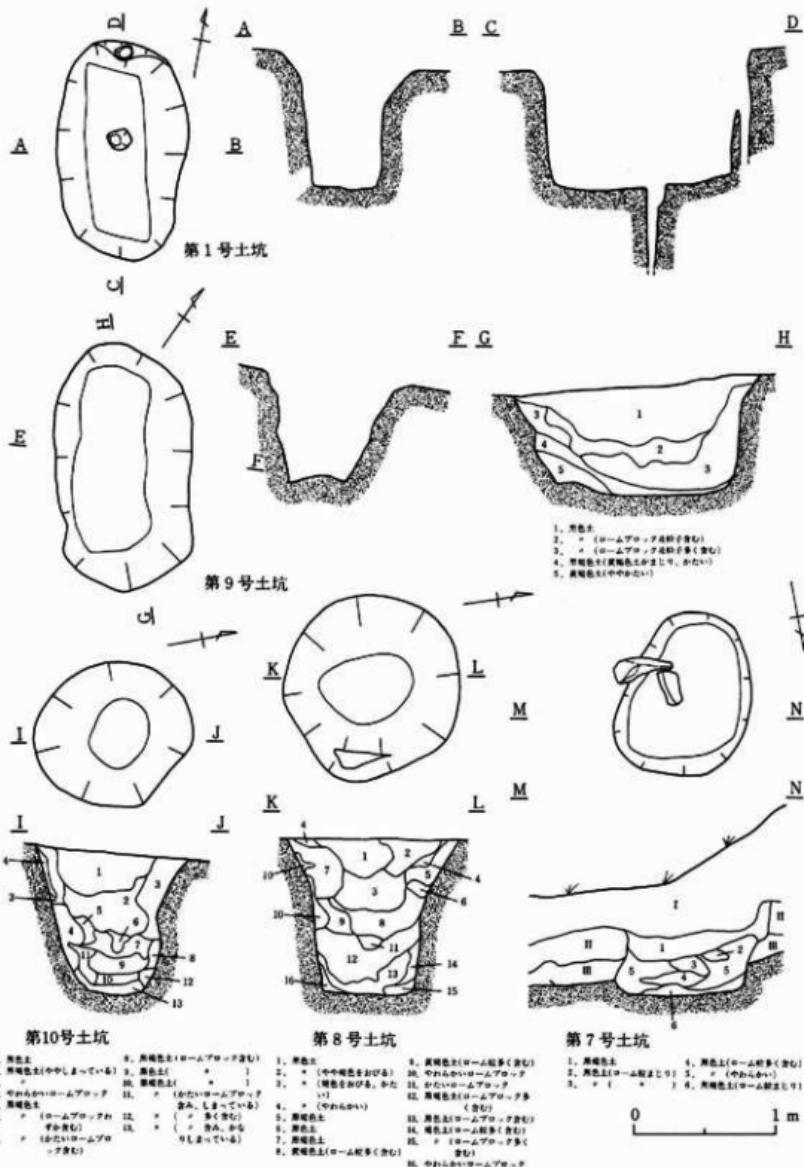
第5号土坑(第7図) J-10区内から発見された落ち込みで、調査時当初には土坑として扱ったが、内部土層の状態からすれば小形のローム・マウンドである。内部から土器等は出土していない。

第6号土坑(第7図) 第5号土坑の東に接して出土した落ち込みで、深さ30cmと浅いが、内部から縄文土器細片1点が出土している。

第7号土坑(第6図) L-8区内に発見された土坑で、I層下面付近から落ち込んでいることが確認されたが、調査時にはIV層上面まで削平てしまっている。内部の土層は軟質で、大形の礫2個がある。土器、石器等の遺物は出土しなかったが、土層の状況から比較的新しい時代の遺構と思われる。



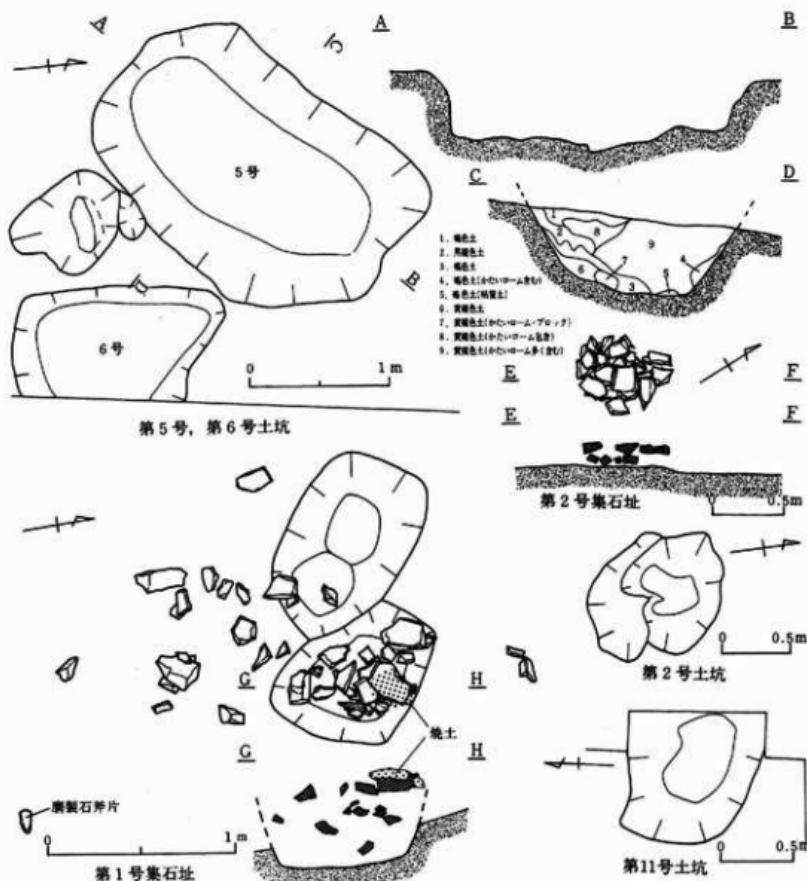
第5図 調査区基本土層概念図



第6図 出土遺構実測図(1)

第8号土坑(第6図) L-7区内に出土したローム・マウンド調査のため周辺を拡張した際に発見された土坑である。開口部の平面形は円形で、断面形も整っている。壁面、底面とも堅くしっかりしており、明瞭であった。土坑内から土器、石器等の遺物は出土していない。

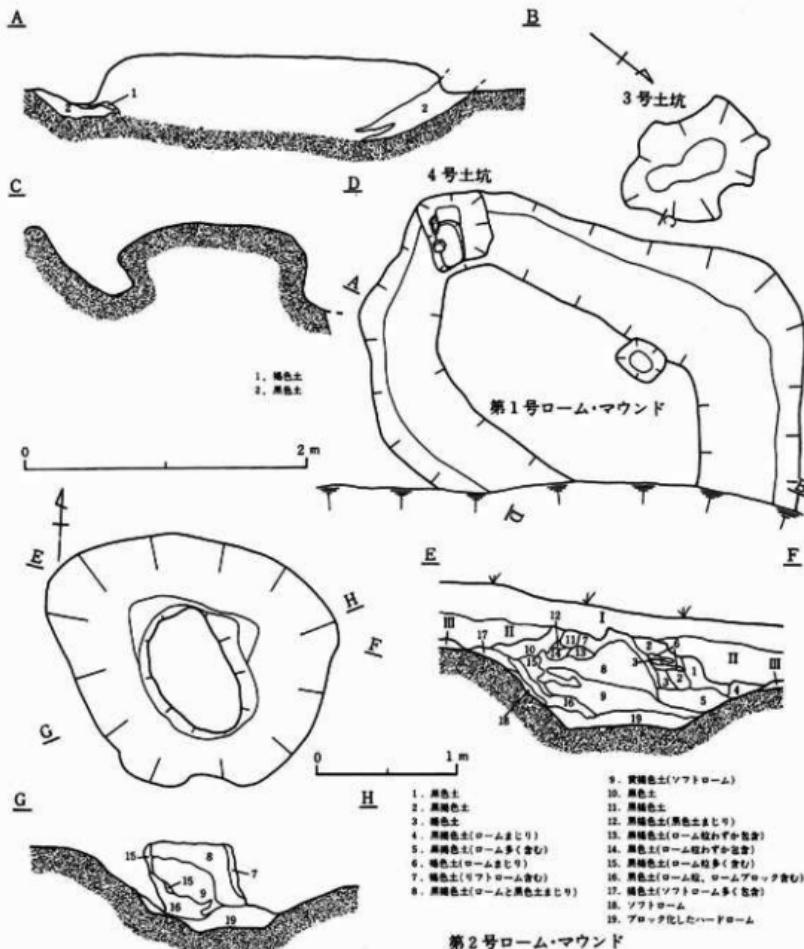
第9号土坑(第6図) L-7区内のローム・マウンドの東側から発見された土坑で、第1号土坑と形状が似るが、平面形、断面形ともやや整わない。壁、底ともしっかりしており、明瞭であった。土坑内部から土器、石器等の遺物は出土しなかった。



第7図 出土遺構実測図(2)

第10号土坑(第6図) L-6区内から発見された土坑で、第8号土坑と同様平面円形だが、断面形は北側の壁がやや袋状になるなど異なる点もある。壁面、底面とも明瞭でしっかりしていた。内部から土器、石器等の遺物は出土しなかったが、近くから粘板岩製の打製石斧1点が出土した。

第11号土坑(第7図) H-7区グリッド東端に発見された土坑で、全体を完掘していない。深さ約50cmで、内部の底面近くから第9図12の打製石斧1点が出土しており、内部土層の上部か



第2号ローム・マウンド

らは染付の陶片1点が出土している。

第12号土坑 I-6区とJ-6区にまたがって発見された落ち込みで、平面不整円形の深さ30cmほどの土坑である。近くには浅いピット状の落ち込みが何カ所かあり、これらと一連のものと思われる。内部から土器、石器等の遺物は出土していない。

第1号集石址(第7図) E-0区、F-0区にまたがって発見された遺構で、礫が集中的に出土したことから当初集石としたが、下部へ掘り下げた際に土坑2カ所が出土した。東側の土坑は、内部に集礫を、また上部には焼土を包含していたと思われ、南側に散在する礫はこの土坑の上部から移動したものと考えられる。これらの礫には火熱を受けた痕跡のあるものもあり、集石南端からは閃緑岩製の磨製石斧の断片(第9図9)が、東側の土坑内からは打製石斧(第9図11)がそれぞれ出土している。

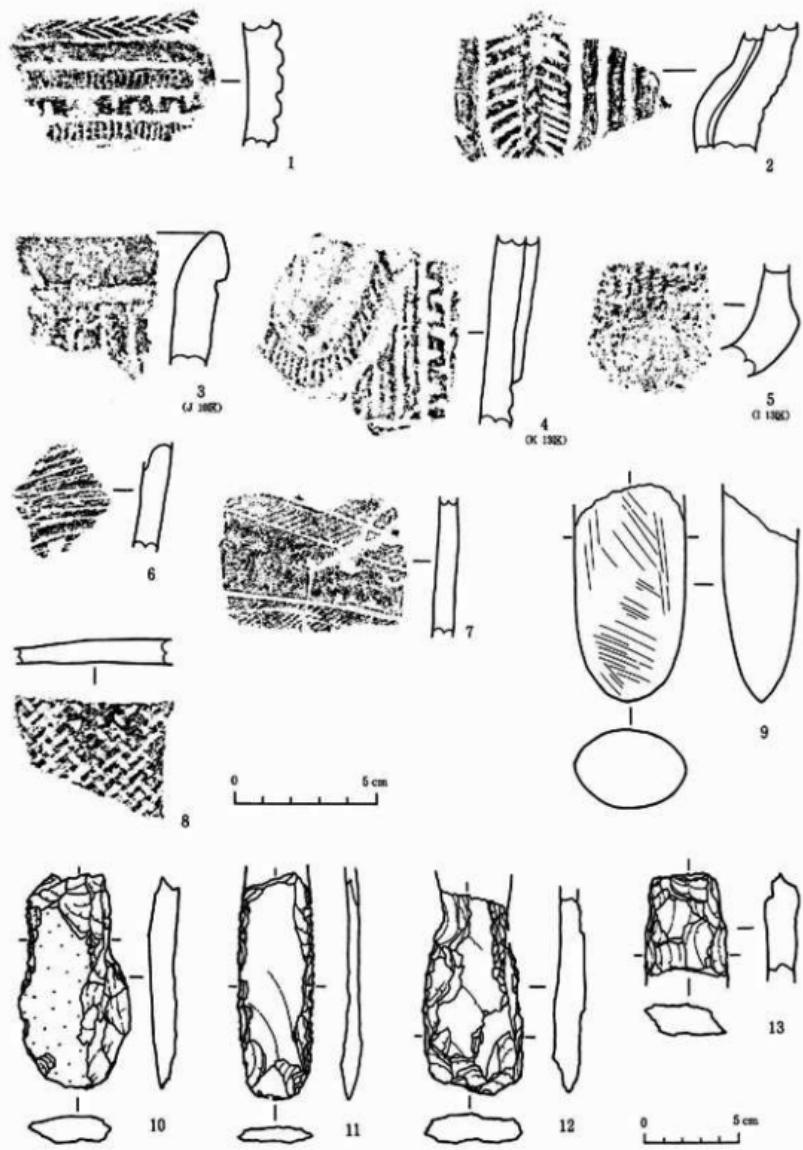
第2号集石址(第7図) I-6区内のグリッドを拡張した際に発見された遺構で、付近から採集したと思われる山石30個以上が集中している。土坑を伴っていたかどうかは不明である。集石内部からは土器、石器等の遺物は出土しなかったが、I-6区内からは近世遺構のものと思われる鐵鎌1点が出土している。

第1号ローム・マウンド(第8図) 調査区内北側の道路沿いのD-11区内カット面にマウンドの断面が露出しており、調査前から存在が確認されていたものである。北東部分は土取りによりすでに失われていたが、長径3.5m、短径2.8mと推定される大形のローム・マウンドである。マウンド下部土坑の南端に4号土坑があり、マウンド部分には径約30cmのピットがあるが、後者は時間的にマウンドより新しいものと思われる。マウンド部分及び下部土坑内からは土器、石器等の遺物は出土していない。

第2号ローム・マウンド(第8図) K-7区、L-7区内から出土した。下部土坑は長径2.1m、短径1.8mで、マウンド部に対しやや大きい印象をうける。土層断面の観察から、マウンド頂部はⅠ層の耕作等により削平されていることが認められ、当初マウンド部はかなり盛り上がっていったことがうかがわれる。マウンド全体はⅡ層が覆っていたことになる。マウンド及び下部土坑内からは土器、石器等は出土しなかったが、周辺から第9図13の打製石斧残片1点が出土している。

その他の遺構と遺物 このほかE-9区、F-4区内からはピットが出土しており、F-4区内のピットは上部に礫を伴っていた。また、K-5区内には東西方向にのびるゆるやかな溝状の箇所があり、第9図8の網代痕がある土器底部片が出土している。G-5、H-5、I-5、I-6区内にも小規模な溝状の落ち込みがあったが、耕作などによる可能性もある。

なお、図示しなかったが新しい時代の遺物として、鉄滓(K-14)、煙管の吸口(F-5)、青磁香炉の口縁部片(K-11)、鉄軸の口縁部片(F-16)、染付の底部片(G-14)、灰軸の細片(F-7)、白軸の皿の破片(E-7)などが出土している。また、表面採集により須恵器の微細片1点がある。これらは鉄滓と須恵器以外は近世以降の遺物と考えられるもので、南側の尾根上にある富士塚(元和6年築成)や、南東の泉水地籍に天正10年まで存在していた移転前の長久寺、それに戦前の開墾作業等に関わる遺物であろう。



第9図 出土遺物実測図

図版 1



1. 調査区（西から）



2. 調査区（南西から）



3. 調査区（南から）

図版 2



1. 調査区(東から)

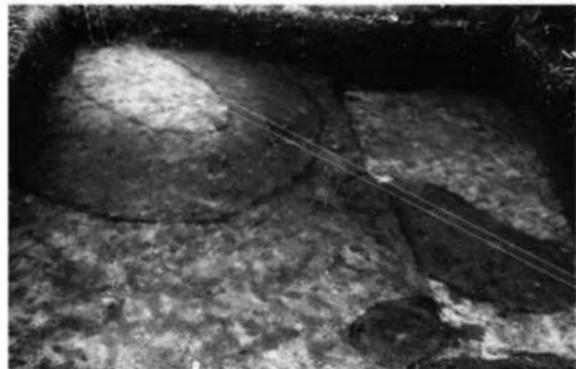


2. 調査区中央部

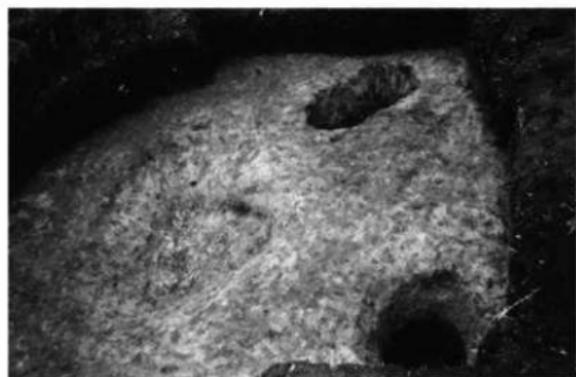


3. 調査区南の「富士塚」

図版 3



1. 第2号ローム・マウンドと第9号土坑の上面
プラン

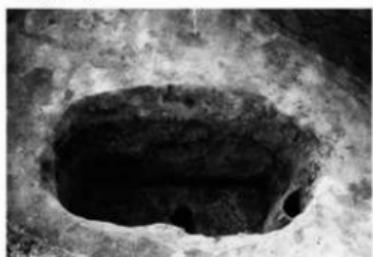


2. 掘り上がった第2号ローム・マウンドと第8号土坑、第9号土坑

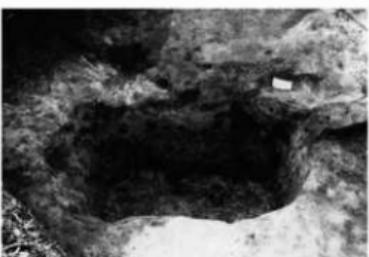


3. I-6区内の第2号集石

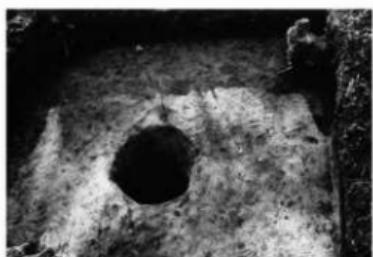
図版 4



1. 第1号土坑



2. 第9号土坑



3. 第10号土坑



4. 第10号土坑断面



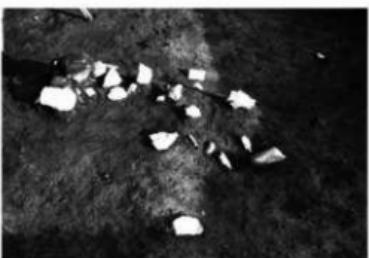
5. 第1号ローム・マウンド



6. 第5号土坑



7. 第7号土坑



8. 第1号集石

VI 調査のまとめ

今回の調査では土坑、集石場等は出土したもの、山麓の平坦地であったにもかかわらず集落址は出土しなかった。出土した土坑のうち第1号、第8号、第9号、第10号は狩猟用の落し穴と考えられる遺構で、この場所は居住の場ではなく狩猟の場であったことになる。

これらの落し穴は調査区南の尾根寄りにほぼ東西に分布しており、恐らくケモノ道を考慮して設けられたのであろう。開口部の平面形は楕円形のものと円形のものとがあり、楕円形の1号には底面と壁にビットがある。土坑内部から土器等の遺物が出土していないため、これらの形態のちがいが構築された時間差を示しているか否かについてはわからないが、あるいは対象とする獲物の種類によっているのかもしれない。調査区全体では、縄文時代中期と後期の土器が主として出土していることから、この時期に属する可能性がある。

縄文時代の狩猟用の大形動物としてはシカとイノシシが主なものであるが、これらの動物が落し穴で身動きできなくなる効果をもっていたと考えられている。第1号の底面のビットは、この効果を高めるために杭などを立てたものであろう。また壁面のビットは、この落し穴がシカを対象とした「はね罠」を併用したものである可能性も考えたい。今回の調査では石鐵をはじめ黒曜石類による小形石器は1点も出土していないことから、この地は弓矢による積極的な狩猟の場ではなく、落し穴による「待ち」の獵を行った場所であろう。なお、落し穴内の土層は底面近くで硬化している状態が観察されたが、落し穴からの動物の運び出し等の作業によって踏み固められたとも考えられる。

近年各地で大規模な開発が山麓へと進んでおり、東京都多摩ニュータウン遺跡群などを好例として、それまでわずかな遺物が表されるにすぎない遺跡で、これら落し穴遺構の発見が相次いでいるが、今後所屬時期や地域性、それに対象動物のちがいなど、追求すべき課題が多い。

参考文献

- 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 『霧ヶ丘』
今村啓爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27
仙東京都埋蔵文化財センター 1982 『多摩ニュータウン遺跡』昭和56年度
村田文夫 1982 「おとし穴」『季刊考古学』第1号
町田市戸場遺跡調査会 1984 『戸場遺跡—縄文時代早期集落跡の調査報告書』
金子浩昌 1983 「狩猟対象と技術」『縄文文化の研究』2
大泰司紀之 1983 「シカ」『同上』
林 良博 1983 「イノシシ」『同上』
今村啓爾 1983 「陥穴（おとし穴）」『同上』
小林達雄 1985 「縄文時代の狩猟」『歴史公論』No.114
辰野町誌編纂専門委員会 1989 『辰野町誌』自然編
" 1990 『辰野町誌』歴史編

発掘調査関係者名簿

1. 富士塚北遺跡発掘調査団

調査団長 友野良一（考古学研究者、宮田村）

調査員 赤羽義洋（辰野町郷土美術館学芸員）

調査参加者 赤羽淑子・有賀みつる・植村翠・牛山幹・小松文子・城倉けさみ・中谷わか子・溝口正孝・宮沢常雄・山内志賀子・大槻朝男・垣内綱男・垣内俊秋・垣内守人・武井卓司・竹入太郎・竹本儀三・宮下安勝（以上辰野町）・保科徳子（宮田村）・栗林勝衛・三浦正義・北条勝美・荻原憲夫・中村良治・伊藤公一（以上企画財政課）・林源司（社会教育課体育係）

2. 辰野町教育委員会事務局

教育長 小林晃一

社会教育課長 有賀久昭

社会教育係長 金子文武

社会教育課主事 吉沢志津江

※役職等は昭和57年調査時による。

富士塚北遺跡

辰野町富士塚開発(分譲住宅地造成)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成3年3月20日

編集・発行 辰野町教育委員会

長野県上伊那郡辰野町中央1

〒399-04 0266(41)1681

印 刷 藤原印刷株式会社
